旅費

水野仙子

館主が二三日關西の方に旅行をして居るので、その留守中は珍しく暢々とした氣分で過された。女中が番茶の土瓶を持つて上つて來る頃になると、さあ一寸一休みといつたやうな眼色でみんながそれを迎へた。かさ〳〵と机の下に風呂敷を披く音がして、きまつて誰かゞ竹の皮包みなどを出した。みんなにまたそれを待つやうな顔色があつた。おしたちの團子、どら燒、時にはしやれて空也餅、そんなものが毎日代りばんこに誰かの風呂敷にくるまれてあつた。

雇主の目の見えない日は、仕事も時間が來ればきつちりしまつたもので、夏の初めの五時といへば、日が入るまでにはまだ十分の光りがあつた。ちどりはいつもの道の角でみんなと別れると、急に操られて居た絲が弛んだやうな心地になつて、くだらない輕口に惜しげもなく漂はせた笑ひの影を、慌てゝ掻き消すやうにその顔を緊きしめた。

今日一日の仕事も濟んだといふ放たれた氣分に僅かな滿足はありながら、これから夜にかけての時を彩る何ものもないことに思ひ至ると、急に泥水が染み込むやうにつまらなさが其胸を浸した。その味のない時間を短くされるだけ短くするために、ひつかへしてみんなの後を追はうかとも振かへつて見たが、朝出掛けに天氣豫報を信じて用意して出た傘と高下駄に氣がつくと、それも厭になつて、たゞいつもの道筋を歩くより外はなかつた。

ちどりは、此頃戰記ものゝ出版を目論んで居る或書肆――それも經營まだ日の淺い――に、當分の間寫字生として雇はれて居るのである。その家は根岸にあつた。豫約募集をして居るので、その事務の方の係りの女二人と男二人女二人の寫字生が、朝の八時から蒸暑いやうな二階の一間に籠つて仕事を初める――星月夜顯晦録、義經記、そんなものが片つぱしから寫されて行つた。昔の字に馴れないちどりは、時々解らない言葉に出會つて苦んだ。それに隨分肩の凝る仕事だつた。

一人で働いて喰べるといふことに爲つた矜りと興味は、いつか其姿を消してあとに尾をひいたものは、苦しい息苦しいそして色の褪めた生活であつた。張り合ひのない、その癖ぢり〳〵と焦せる氣分の絶えない連續が、ちどりの踏んで行く日々であつた。今の仕事だつて限りのある仕事である。豫定のものだけが寫し上げてしまひへたら、もうあの事務室に用

のない體になつてしまうのである。絶えず怠る者はないかと注がれて居る館主の光る目の下に、一枚〳〵と急いで行くその末は、また何處かに働く口を探さなければならない――さう思ふと今からもううんざりしてしまつて、仕事の絶えた時の不安な心持に面をそむけたいやうな氣持になつた。

いつまでこんな状態の月日を過さなければならないのだらう――？この頃はもう經濟からそれを選んだ自炊も厭になつた。すべてが面倒になつた。投げ遣りになつた。頭のはつきりして居る朝と、しんみりとものを思ひたいやうな夕暮方とにでも、せめて落着いて本でも讀むことが出來たなら――

ちどりはふと、此間から考へて居るそのことを思ひ出して、塒の移動にでも少しの彩をその日々に見出したいと思つた。そして今度は手許が苦しくも、思ひ切つて賄つきのところを探してみようと思つた。それからちどりはまだ陽のあるのを幸ひ、二三日前にふと目にとまつた貸間の札を心當てにして、少しばかり廻り道をした。そこは阪本の電車の通りだつた。貸間の札はまだ取れずにあつた。小さな醫院の門内に其家があるので、打水のしてある敷石におづ〳〵下駄の音を低めて、勝手口の方の細い露路を行くと、突き當りにそれらしい二階建ての家があつた。格子戸に手を掛けて案内を乞ふと、直ぐに障子が開いて馬鹿に金歯の光る女が顔を出した。いつも女が女に會つた時に經驗する、ぢろ〳〵する眼を全身に浴びながら、ちどりは貸間のことを聞いた。二階に案内されて上つて見ると、二間を襖で仕切つた六疊で、あまり新しくはないが纏つた感じのする部屋であつた。下宿料をこの主婦らしい女から聞いた時、ちどりはなんともいへぬ心細さをその女の前に隠した。十二圓といへば今のちどりの収入を殆ど全部提供しなければならないのであつた。

『學校は？』と、その女は聞いた。女一人には廣過ぎるやうな曖昧なことを言つて、ちどりは下りしなに隣りの部屋を覗くと、柱に掛けてあるしほたれた飛白の袷から、眼覺し時計の乘つて居る机のあたりに、如何にも男の匂ひが充滿してるやうであつた。それと、薄暗い玄關に亂雜に脱ぎ捨てゝあつた澤山な子供の下駄とに、ちどりは未練なくそこを出た。

細い道へ、曲り曲つた露路へといふやうにはいつて行くと、大抵共同水道のあたりに女達が群がつて居た。それらがなんとなく氣忙しい氣分をつくつて、塒を求めて歩くには相應しいやうな、またうら侘びしいやうな思ひがちどりの胸を描き拐つた。

或家の一間は暗かつた。丁度屋根裏のやうな感じのする天井の低い二階で、光線の取れるたゞ一方の窓は腰が高く、煤けた障子を引くと、黒く焼けた隣りのトタン屋根の埃つぽい上から、薄墨色の夕暮の陽が僅かに疊の數を數へさせた。三四疊ばかりの薄暗い店に染糸を繰つて居た二人の女工らしい

女が、強い眼光でちどりを見送つた。息も苦しいほど肥つた内儀の、大きな眼は又其女達に意地が惡るさうだつた。

貸間の札がおきまりに斜めに上繪師の瓦斯燈の柱に貼つてある。歸りかけた足をとめて、兩側に並んだ長屋の小瀟洒したのに望みを掛けてはいつて行くと、突き當りて格子戸に「神占」の看板が掛けてある。勝手が違つたやうに思つたが、表札はやはり貸間のある家の姓と合つた。ふと面白いといふやうな氣分が萌して、いきなり潛りを開けて跼みかげんに聲をかけると、老年らしい彈力のない返辭が聞えて、暫くすると、顏の弛んだのろいやうな老女が其處に立ちはだかつた。

『えゝ、そりあ賄つきにしてもようござんすが、狹いんですよ。』

『幾疊です？』

『三疊でございます。』

机を一つ置けば寢るところも無くなつてしまふ――さう思ひながら、ともかくも其部屋を見せて貰はうとすると、

『此處ですが……』といつて、老女は、多少此邊りには華かに見える身なりをして居るちどりに、少しく恥づるやうな氣ぶりであつた。襖を開けると、その袖の下から薄暗い部屋が覗いた。古葛籠などがまだ置かれてあるらしかつた。ふと見ると、足をちゞこめて丸い脊中をこちらに向けて人がひとり横になつて居る。ちどりはぎよつとした。よく〳〵見ると、灰色の撫で髪の下に、赤黒い毛が枕にしてあるのだつた。都屋といふのはそれと、玄關とも居間ともあるいきなりの六疊とより外はない家なのである。土間の障子を開けると直ぐに赤黒くなつた毛布が敷いてあつて、古い机が据ゑてある。薄い坐蒲團が敷いてある。小さい長火鉢がある。手馴れた筮竹と算木が、型の如くに机の上に置かれてあつた。

『まだ〳〵自分の生活には冗慢がある――。』

ちどりはかう思つて自分の心に鞭打つた。遲ぼれた晝寢に寢過したものでもあらう。あの老人の手枕のまろ寢――それが、話し聲が耳にはいつて氣がついても、出るに出られなかつたのであるやうな氣がしてちどりはならなかつた。あの背中の丸さ――

濕りのない道に高下駄は足の痛いものであつた。

木戸口の柱に貼つてあるちどりの小さな名刺の、字劃が朧ろなほどに日が暮れつゝあつた。緩んだ鼻緒をしつかり握りつめて歩いて居たので、足の拇指が草臥れて痛い。

『只今。』と上りはなから聲をかけると、

『へえ、お歸んなさい。』と、いつもの通りな小母さんの調子が聞えた。

裁板の上に電燈を低く下して、急ぎのものらしい女物の八つ口をせつせと紵けて居る。そのまゝちいどりが梯子段を上ら

うとすると、
『宮城さん、書留が來て居りましたよ。』
『書留？さう？』
ちどりは思ひ掛けないことなので、一足あげかけた足を下して怪訝さうに立止まつた。
『一寸待つて下さい。今直ぐに出してあげますから。』と、腰をたてかけながら、小母さんはちよいと針の手をとめるのを惜んだ。
漸く最後に拔いた糸をぷきりと手際よく齒で嚙み切ると、
『お判がわかりませんでしたからね、うちので受取つて置きましたよ。』といひ〳〵、大きな眼鏡をずり上げながら起つて來て、火鉢の引出しから大形な封筒を出してちどりに渡した。
『どうもお世話さま。』
ふと裏書をかへして見て、ちどりは思ひ當つたやうにそのまゝぎし〳〵と二階に上つて行つた。なんとなく胸が安かでなかつた。
机の上に投げやるやうに置いたアルミの辨當箱が、如何にも空虛な貧乏くさい響をたてた。横倒れにぺたりと机の前に坐つて、横裂けのする封筒の口を切ると、豪傑肌の大きな文字が、卷紙の裏にまで墨をにじませて居る。ちどりはその巾廣く卷かれた卷紙を繰つた。
『拜復、早速の御返書滿足に奉存候。そんなことならお安い御用決して御心配は之あるまじく、早速旅費として金十兩封入仕候。思ひ立つたらなんでも遣つて見ること、是が倫敦とか巴里とかなら、少しは億劫がつてもよろしく候へど、高が内地うちのこと、殊に、後髪引かれるやうな係累も無之事と（推察在罷候なれば、當分思ひ切つて御出でなさる可、地方の研究も滿更無駄事にては御座なかるべくと被存候。田舍もなか〳〵暢氣にて、殊に腰掛けには持つて來いに候。社長も小生の話に依り、寧ろ歡迎の意味を洩し候位なれば、決して居心地惡き所には致さゞる積りに候。筑紫野の叢に君の才筆を得て、大に家庭欄の矜りと致度、田舍者對手には東京者は兎に角大に巾が利き申候。
最早御承諾濟みのことなれば、効能書は此位にて止すべく候。可々　何日頃御出立の運びにならるべく候や、なるべくお早く願上候。』
ちどりは讀み終つて、結果があまり早く無造作に來たのに思ひ惑つた。膝の上に落ちた爲替劵の金額に凝乎と見入りながら、暫くは身動きもせずに考へ込んだ。
立て籠めてあつた障子を開けると、すぐ家の臺石の岸を流れて居る藍染川が、泥溝のやうな黒ずんだ水面をして、瀬戸物の缺片や夏蜜柑の皮などの芥を澱むて居る。時早い蚊の唸りがかぼそくそこらに起つた。
思ひ出した樣にちどりは電燈のスヰッチを捻きつた。赤味

を帶びた其光りが、部屋一ぱいに蔓つて居た薄闇を逐ひ退けると、押入れの唐紙の前に掛けてあつた衣紋竹の脱ぎ捨てが、思ひ切つて肌を露はにしたやうな紅裏の矯きを見せた。坐蒲團のメレンスの、ちら〳〵はいつた紅にも女らしい潤ひが見え出したのに、ちどりは微かな滿足を覺えながら惱しく窓の閾に倚つた。

ふと思ひ出した人に手紙を書いたのが初まりだつた。その人とは元からあまり親しく交つて居たのでもなく、年始状の時に思ひ出す程の知己に過ぎなかつたが、ふとした氣分から——それは郵便を樂しみにして歸つて來る日々に、一度でもその失望を避けたい爲めに、自分からあちこちへ撒いた種のうちの一つであつた。

Y氏はいつか鄕里に近い福岡に行つて居て、そこで一つの新聞を起し、自分は二面の編輯長をして可なりの勢力を揮つてるらしかつた。ちどりの何處か放拋氣味な、低級な反撥的の諦めの氣分の見える手紙を見ると、その新聞の家庭欄を擴張して、ちどりを婦人記者として迎へるやうに計つてもいゝと言つて來た。ちどりは其好意に心動いた。それに報酬もよかつた。兩親が失くなつた後のちどりは、田舍の兄から何をしようと行動を自由にされて居るので、確りした覺悟もつかなかつたけれど、心が動いたまゝに返事を書いた。旅費の心配のことなども書き添へるのを忘れなかつた。

獨りで呑み込んだやうなY氏の手紙を見ると、その無造作さが頼母しく、力強くも思へるけれど、かういざといはれては、さすがにあれもこれもと心殘りなことが群がつて來るのであつたかと思ふとまた、知らぬ土地のもの珍しさや、喰べてのあとに着替への一枚も出來さうな其報酬や、その間には語學の勉強も出來よう、本も讀まうといつたやうな希望が、早くも頭にその根を植ゑる。そこから新しい自分の生涯が展けて來るのかも知れない——と思ふと、急に息づまるやうな都合の生活が厭はしく、それを振り捨てるのになんの未練もないやうでもあつた。

ちどりは誘はれるやうに机の上の爲替に手をのばした。使ひ途の定つた金ではあるが、それでも手許にあるといふことが暖いゆつたりしたものが懐にはいつたやうで不思議に心強かつた。

少し心が落着いて來ると共に、ちどりは急に空腹を覺え出したので、戸棚を代用にして居る押入れの上の隅を開けた。お菜になりさうなものは何もなかつた。けれども今から何かこしらへることの面倒さを思ふと、何も彼も我慢する氣になつて、やがて香のものゝ端をきざみに下に降りて行つた。

いざ暫くでも東京を離れるとなると、たとひ煮豆屋の鈴の音にでも名殘りが惜しまれるのであつた。それがうす甘い情

緒を誘つて、掻き拐られるやうな譯もわからない思ひにほろ〳〵と涙ぐましくなつたり、机を並べて居るみんなにそれとなく地方行をほのめかしては、譯もなく勇み立つたりして居た。ちどりは妙に足許の地につかないやうな四五日を過した。別段今の仕事を止めるのに、むつかしい手續きとてはないけれど、それにさへ譯もなく一日二日と日が經つて行つた。さうして月の半ばに日がかゝると、月給の都合やら、月の初めといふ定りのいゝ日に事を決めたいといふやうな、さもない理由を見つけ出して、今日は明日はと日を惜しんで暮した。

今まで拗ねたやうな意古地な心から、見る氣もなかつた芝居などに、あれもこれもと興が湧いて、立ち見の群から豆のやうに動く煌かな舞臺を、いつにない充實した心持で眺めて居ることもあつた。銀座街の柳の葉の繁りにも、人知れぬ微妙な思ひが湧いた。

目覺しく翼を擴げて來た上野の靑葉の下の交番に、巡査の白い服が目に馴れて來た。その足許に續いて乾いた道が、水撒車の畫いて行く僅かな線を、やがて影繪のやうに薄めて行く。そんな日が梅雨の晴れ間にあつた、かと思ふとまた、雨氣を含んだ不機嫌な雲が、降り出す機端を狙つてむずかつて居るやうに、額を窘めてぢれ〳〵しい氣分をそゝる日が續いた。

夏になると一瘦せ瘠せねばすまぬちどりは、暑いにつけ鬱陶しいにつけ、夏に馴れるまでの間に一病み病むのが常のやうであつた。それを十分心に飲み込んで居ながら、ふとした氣分の緩みから、制すに制し切れなかつた渴きに、ちどりは或夜廣小路のとある白いレースを潜つてアイスクリユームを飲んだ。その散歩から根津の宿に歸るまでの間にも、氷屋の店々が妙に床しくてならなかつた。宵に喰べた油ものが、丁度海綿のやうに胸に蟠つて居て、いくらでも〳〵水氣を吸ひ込むやうに思へた。部屋に歸つてかくも、ちどりは自分に隱れるやうな心持で水道の水を飲みに出た。

『遂々！』

ふと可笑しいやうな、惡落着きに落着いたやうな氣分で自分を眺めた時、ちどりは根津の家の二階に横はつて居る自分を見出した。蚊帳の吊り手を斜かひに兩方から集めて、そこに氷囊を吊したあとの麻糸が、ふら〳〵と頭の上に搖れてゐる。搔卷の上に兩手を出して眺めると、氣のせいばかりでもなく靑白く細らんだ腕に、混亂した靑さを見せて靜脈が這つて居た。よく〳〵見て行くと、右の手の中指の先に、ペン軸の觸れたあとが、その日のまゝになつて居るインキの色に殘つて居る。

今から思ふと、すべてが夢であつたかのやうにぼんやりとして居る。朝出掛けに極く下痢したのを氣にして、喰べる物

も喰べないで出たのであつたが、蒸されるやうな部屋でありながら、時たま吹き込んで來る風が妙にひや〳〵と肌に觸つて、寒氣ともつかずに體が慄えた。机を並べて居るみんなに顔色が惡いと言はれてからは、急にどうにもかうにも我慢が出來なくなつて、その時はどうする氣もなく館を出てしまつた。途中で辻車に乘つた。そのまゝ近所の小さな醫院に車を着けさせて、ひや〳〵する藥の香に包まれながら、診察室の寢臺に體を横へた時、ちどりは安心と不思議な惑亂とに思はず精神が遠くなりかけた――。

急激な腸胃カタルに腦貧血を起しかけたのだと醫者が言つた。齒を喰ひしばつていくら忍ばうとしても、意地惡く抉ぐる疼痛に堪えられなくなつて、注射の爲めに幾度下の小母さんを使ひに立てたか知れない――かうして快くなつて見れば極りの惡いほど世話になつた小母さんに、お禮には何を買つたものだらうなどゝちどりは考へ出した。どんなものでも今は惜しくなかつた。

時々未練らしくしく〳〵と腸をつゝく痛みに摺えて、慌てゝ横を向くと熱に蒸れた髪の匂ひが胸惡く鼻をつく。嚇すやうなその疼みがやがて薄らいて行くと、枕許の藥壜を卷いて居る眞新しい名札に、横書きされて居る自分の姓名を、不思議なものでも見るやうに眺めて居るうちに、ちどりはいつかうと〳〵となつて行つた――。

ひと厄を振り落したやうな喜悦に心を輕くして、憔悴の見えるちどりが再び仕事に通ひ出した頃、十圓の旅費は跡方もなく消えて居た。それが恰も神の援助でゞもあつたかのやうに、ちどりはそれを藥の代とするのに躊躇しなかつた。Y氏には病氣のことを少しく重く長びくやうに書いて、暫くの間待つて貰ふやうに言ひ送つた。その間にどうにか旅費の工面をする積りだつた。

五六日見ぬ間に如何にも眞夏めいて來た光りが、折り目の汚れた薄色の洋傘を通して、眩しくちどりの目を射つた。廣小路の乘り換へにあちこちして居る人だかりに、薄物を纏ふた女達は美しかつた。ほんのりと赤味を萌した肌に、襟のない一つ浴衣の意氣なのと、絽縮緬の羽織の肩をぬけてだらりとしたのも、東京でなくては見られぬすつきりとした姿であつた。

ふとちどりの胸には輕い妬みが燃え上つた。それは、自分が間もなく此華かな土地を去つて、假令完全ではなくても、若さの彩りを都會の流行に外れて過さねばならぬといふことに依つてであつた。急にちどりは、自分の體の廻りに土臭い匂ひを嗅ぐやうな氣がした。

旅費の責任が重く〳〵ちどりを苦しめた。

一月はいつか經たうとして居た。ちどりの旅費はなか〳〵思ふやうに行かなかつた。強いて作ればその位のことはどうにか なら ないこともなかつたけれど、たゞ責任を感じるばかりで、心は少しも旅立ちに向つて進まなかつた。Y氏からは一度ばかりそれとない催促の手紙が來たけれど、今暫くと言ひ送つたまゝ、ちどりは中毒のやうな都會の執着と、息苦しい責任との間に迷ひ〳〵つて、一日逃れにその日を送つて行つた。

夏はいよ〳〵長けて行つた――。

Y氏からは其後暫く消息が絶えたが、ふと或日、あの話があつて以來、毎日送られて居る其新聞を何氣なく披いて見た時、ちどりは思はず聲をたてないばかりに驚いた。Y氏は急激な赤痢に罹つて、無造作に亡くなつて居たのである。

ちどりは板のやうな胸を抱へて暫く茫然として居た。その驚愕は復雑であつた――。

【入力者注】以下の修正を施しました。(数字は底本の頁・行)

67上15　滿足　→滿足

68上13　若しくも、→苦しくも

68上17　小さな醫院の　→小さな醫院の

68下21　惡るさうだつた。→惡るさうだつた。

69下11　電燃を低く　→電燈を低く

70下24　諦めの氣分　→諦めの氣分

71下3　掻き掻られるやうな　→掻き拐られるやうな

71下14　充實した心持で　→充實した心持で

72上8　歸つてかくも、　→歸つてからも、

72上15　掻卷の上に　→掻卷の上に

72下11　かうして快くなつて　→かうして快くなつて

72下16　熟に蒸れた　→熱に蒸れた

72下18　横書きされて　→横書きされて

73上2　暫くの間　→暫くの間

73上6　廣小路の　→廣小路の

底本：「現代」大正二(1913)年八月号
入力：小林　徹
公開：令和四年一月十三日

水野仙子「作品年譜」に戻る

謝辞：底本コピーをご提供下さいました菅野俊之様に
厚く御礼申し上げます。